

言葉と祈り

小説家・劇作家

前田司郎

両親は「口先男」と僕を呼んでおりました。「口から先に生まれた男」という意味らしく、よく喋ることを揶揄して呼んでいたみたいです。よく喋るのは量ではなくて、質の方でして、口ゲンカが得意というか、屁理屈が得意だったのです。それで幼い僕は自分は言葉を使うのが得意だと思いつみ、だったら小説も書けるだろうということで、小説家を目指したのです。

当時は、口語と文語の違いがよくわからなかった。今もあまりよくわかっていませんが。喋る言葉と、書く言葉はどうも違うようなのです。

そして戯曲は不思議です。喋る言葉を書き、書いた言葉を読みますから。

僕の作家としてのキャリアは、劇作家として始まりました。喋ることをそのまま書けば戯曲になるのだからこんな楽なことはないと、安易に考えていたのだと思います。ところがそうも行かない。不思議なことに、喋る言葉と書いても戯曲にはならないのです。

なぜなら戯曲には流れがあります。日常のおしゃべりにも流れはあるでしょうが、戯曲の流れは物語と呼ばれたりする流れのことです。

日常の会話に比べ、戯曲上の会話は圧倒的に情報量が多いのです。これは文語と口語の違いとは少し違う話ですが、そこに帰結するのでしばらくお付き合いください。

簡単な現象で言うと、戯曲の中の人物の方が実際の人物よりもたくさん喋る傾向にあります。また、戯曲の人物の話す

す、しかしおもしろくはない。それは「水溜り」ではあっても「川」ではないのです。先ほど戯曲には流れがあると申しましたが、これは私見であって、流れのない戯曲もあっていいでしょう。「水溜り」のような戯曲でもおもしろいものはあるでしょう。しかし、きっとそれは、作家の意思が入った「水溜り」であり、日常の会話そのものとは違うはずなんです。

もう少し詳しく話します。日常の会話と戯曲の会話の違いの中で、僕が大きいと思うのは、そこに見せよう聴かせようとする意思があるかないかだと思うのです。戯曲は見せる聞かせることを前提に書かれていますから、当然、未来を想定しながら書かれています。望む結末に向けて恣意的に言葉が選ばれています。これは日常とは大きく違うことです。

そしてその違いこそ、文語と口語の違いでもある気がするのです。

まあ、戯曲とはそもそも口語で書かれ

たものだ、という考え方もあるでしょう。しかし戯曲に書かれた言葉は、やはり書き言葉であり、俳優の身体を通してはじめて話し言葉になる。その変態が上手く行かないと、書き言葉を話す変なお芝居が出来上がるのです。俳優の身体の中で起きている不思議な変化、書き言葉が話し言葉になり、まるで文字が生命を得て蝶のように飛んでいく、その瞬間を僕たちは興奮して眺めます。

まるで言葉が生きているように見える

言葉は、日常の人物が話す言葉に比べて、目標が少し遠くにあります。それはどういうことかと言うと、日常の私たちは頭に浮かんだことを、例えば「お腹減ったね」というように話すわけですが、このとき、私たちの頭には「お腹が減ったからご飯を食べたいのだけど一緒にどうですか?」とか、もしくは「あなたとご飯が食べたいです」とか、そういう程度の目標をもって話します。

戯曲の中の人物はもう少し先を見ています。「お腹減ったね」「え? そう?」「どっかご飯食べに行かない?」「うーん」「あ、じゃあ帰ろうか」とか。戯曲上に未来は書かれておりますから、未来(ここでは、一緒にご飯を食べに行くのを諦める未来)をどうしても意識してしまいます。作家はただ喋るべき言葉を今まさに書いているようであり、実は未来を見ながら喋る言葉を書いている。

仮に、実際におしゃべりしているところを録音して、文字起こすとします。それで戯曲になるかという「なりま

のです。

僕は小説も書きます。大して上手い文章じゃない。それでも書かずにはいられない。仕事が無くて僕が書きます。これはなんなのか。僕にとって書くことは祈りに近いのじゃないだろうか。

喋る言葉、小説の言葉、これは誰かに見せるための言葉です。祈りの言葉は誰かに見せるためのわけじゃない。神のような存在と話すための言葉でしょう。ならば僕の文章が祈りであるためには、誰かに見せるために書いてはいけません。いけないけど、結局それでお金をもらうわけだから、最終的には見せる。でも、見せるために書かない。でも、見せる。今僕はその辺をグルグルまわっています。

このとりとめもない文章は一体、誰に向けて書かれたもので、何のために書かれたのでしょうか。よくわからないのです。



前田司郎
まへだ しろう

小説家・劇作家・演出家・俳優。1977年東京都生まれ。97年に劇団「五反田団」を旗揚げ。2005年に「愛でもない青春でもない旅立たない」で小説家としてデビュー。08年に戯曲「生きてるものはいないのか」で第52回岸田國士戯曲賞を、09年に小説『夏の水の半魚人』で三島由紀夫賞を受賞。